木村文助研究
通信5号
2002・4・1

山の家（うち）（推奨）

北海道亀田郡大野小学校尋常科六年　釜澤みつ

私は小さい時から、両親と別れて、祖父（じじ）の家で暮らしていた。

去年の田植え休みの時であった。ガロー鉱山の父のところへ着物を買ってくれと手紙をやると、母から「父が怪我をして函館の横山病院へ行くところだから、休み中しんぼうせよ」と言う手紙が来た。二日ばかりして爺ちゃんが「み、ガローさ行って子守りでもして来い」と言って五円札を出したから、それを持って翌日朝早く握り飯を二つ持って、一番汽車で急いで行った。

上磯の会社から鉱山の電車へ乗って一時間ばかりも行くと、終点だったので、電車を下りると、走って家へ行った。すると家の中には、弟たちが二人いて「父ちゃん、母ちゃん、おいおい」と言って泣いていた。座敷の隅にお膳があって、茶碗や飯粒が、そっちこっちに散らばっていた。私が行くと、二人はなおも声高く泣くので「母ちゃんどこさ行ったの？」ときくと「知らね、おいおい」と泣くので、小さい方をおぶって、大きい方の手を引いて、会社の方へ行くと「み」と、どこかで呼ぶので、見ると、右手の高いがけの上で母が石を落としていたから「母ちゃん」といって、弟の手をはなして走って行くと「母ちゃんは、こうして稼いでいるんだよ」と言ったので、私は知らないまに、涙がながれてきた。私は母の顔を見て「母ちゃん、帰るべ帰るべ」と言うと、母は「帰れば今日食う米買われないし、父ちゃんにも送ってやること出来ねんだ」と言った。私は腰に結んでいた風呂敷をほどいて、爺ちゃんのよこした五円札を渡して、家に帰った。

私はわらびを取って売るつもりで、縄と風呂敷を持って、二人の弟をつれて、村の山へ行ったが、わらびは一本もなかった。すると弟が「おどいであった山（おとうさんのいた）にだらある」と言ったので、そっちへ行くと、たくさんあった。私は弟にも背負わせ、自分でも少し持って家に来たが、まだ母は帰っていなかった。私は二人の弟をつれて、わらびを売りに行ったが、或家の戸口まで行ったが恥ずかしくてはいれないので、小さい弟に「お前は入れ」と言うと「いらねいや、姉（ねね）はいれ」と言ったら、大きい方の弟が「おら行って売って来る」と言って中へはいった。私は少しはなれてまっていると、弟は銭を握って走って来た。私は面白くなって四、五軒の家で皆売ってしまった。帰って来たら母は御飯をたいていた。

「赤い鳥」昭和二年八月号

＊「石」とは石灰石の事と思われる。
＊現代仮名遣いに直してある。

評一行一行がひしひしと胸を打って、しみじみといたましく、涙ぐるしくさへ、なって来ます。叙写は、あんなにたどたどした平浅なものですが、ああした事実そのものとそれを表出する、真実、単朴な態度との牽引です。

お父さんが入院していられるあとの、山のお家へ出かけて見ると、お母さんもいられなくて、二人の弟さんが「父ちゃん、母ちゃん、おいおい」と泣いている、片隅のお膳の上には、茶碗や飯粒がちらっばっているという光景や、みつさんが、泣いている二人を、おぶったり、手をひいたりして、お母さんを探しにいくと、或たかいがけの上で、お母さんが石を落としていられる、それを見つけて、思わず弟さんの手をはなして走っていくところ、そこでのお母さんとの対話、それから、みつさんが、お母さんの手だすけに、わらびをとって売ろうとする気持ち、やっと、どっさりとって、弟さんに、しょわせたりして売りにいくところなぞは、たったあれだけの素描風な叙写にもかかわらず、おのおのの場面の実感がまざまざと生き躍っていて、この上もなく哀れです。

はじめは人の家の戸口に立っても、わらびを買ってくれというのが恥ずかしくて、弟さんをはいらせたが、売れるとおもしろくなって、四、五軒のうちをまわって、すっかり売ってしまったという、その喜びそのものさえも、あわれに、いたいたしい気がします。

併し考え直すと、ああした中に立ちつつも、これだけの純情と純感とに光っているみつさんは、どんな表面的に幸福な子供たちよりも、もっともっとふかく神からめぐまれている貴い子です。学校でも、先生やみんなが、よく可愛がって上げて下さることをお願いします。（赤い鳥）

「山の家」は昭和六年発刊の林芙美子著の小説集「彼女の履歴」に紹介されている。短編の「山の教師から」にほぼ原文に近いかたちで載っている。

林芙美子

小説家。下関生まれ。苦学して高女卒。自伝的作品「放浪記」で名を成し、抒情と哀愁をたたえた多くの作「清貧の書」「晩菊」「めし」などを発表。（一九〇四～一九五一）　広辞苑

◆◆◆◆

二〇〇一・一一・三～四　大野町文化祭で「赤い鳥・木村文助」展を郷土資料室で開く」町長他多数参観。

一一・九　森町図書館へ出向き資料を閲覧する。

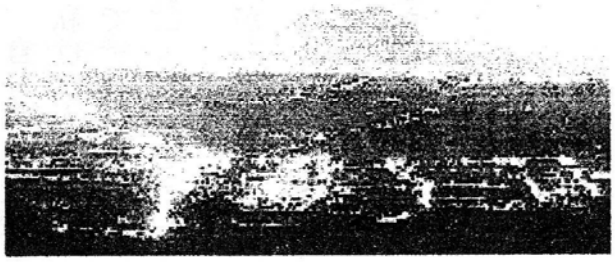
一一・一五　京都仏教大教授岡屋氏より「木村文助研究―赤い鳥から生活綴り方へ―」学会発表論文写し届く

一一・―　伊達市木村九女氏より秋田県新聞コピー届く。

二〇〇二・一・一五　大野町教委で少年少女体験教室開く。参加者二〇人に「赤い鳥綴り方集」をプレゼント。

二・―　秋田県畠山義郎氏より自ら投稿掲載の新聞届く。

二・―　函館図書館へ出向く。林芙美子著「彼女の履歴」を借用。



三・二　北海道新聞道南人物散歩に載る。「木村文助　戦前の綴り方教育の指導者　大野小の名を全国に」函館市近江幸雄氏

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

「村の子供」（木村文助編著）掲載論文。前号の続き③

本文集存在の理由　教育価値に就いてである、綴り方の仕事は、単に創作するのみではない。他に鑑賞という重大な任務がある。その二つは相助け、相補って進むばかりでなく、独立してもあるべき立派な理由もある程重大なものと信ずる。然して鑑賞の為には、現在幾多の綴り方集模範文集が提供されているが、本当に一人一人の児童に就き、精神を根抵から揺り動かす力を持っているかどうかを考えると遺憾ながら然りというが出来ない。生活を異にし、地理、人情を異にする甲地乙地の各児に、果たして共通な模範文があり得るであろうか。これ共通という事を標準とする時、生活が無視され、生活を本位とした時、共通という点を犠牲にせねばならぬからではあるまいか。

然らば精神の内面に立ち入り、真に児童の生活を指導せんとせば、必ず生活の共通点を多分に有し、十分の理解を持ち得る範囲から先ず第一に選ばねばならぬのが当然である。然して生活上の共通な理解は、風習、地理、人情、言語を同じくして居る範囲、即ち郷里である。自校の模範文は、東京や九州に求むべきに非ずして、其の地の児童に求むべきである。大人から見て文は整わぬとも、児童にとってそれは他のものよりも慥かに強く胸を打つものがある。かくて児童の鑑賞材料としては其の校においては先ず、其の校内から第一著に之を求むべきである、「村の子供」存在に第一理由は此処にある。

然し生活の理解という事には二様の意義がある。勿論二者は、相関的ではあるが芸術の本義から見れば外面的の理解は或程度以上不可能であり、又其の必要もないが、内面的には生命の本質上、児童心理上共通したものがあって、理解が成立する。ここが綴り方の本質的価値のある点である。こうして見るとき綴り方の出発としては、外面的事情を顕慮する上から鑑賞文は主として同校に求むる事が適当であるが、少し進んだときは必ずしも之に拘泥する必要がないのである。

児童研究の書籍とか、資料とかは、大半都会を標準としたものである。児童の雑誌でさえ、都会で造られ、都会で売られる上から内容も都会向きで、田舎は兎角無視され閑却され勝ちである。かかる意味において他の村落児童に対しては幾分共鳴するものがあろう。又都会の児童諸君には変わった生活によって体験を拡張さるるであろう。又父兄として社会人として一服の涼味に値するものがあるかも知れないが、これ本集提供の他の理由である。

以上便宜上三点に亘って論じたが、本集は同じ根幹より出たもので、三者密接不離の関係があり何れ軽量をつくべきでない。方言を中心として三者を論ずることも出来、題材を中心として論ずることも出来るのであるが、何れも綴り方の目的観、児童観が根抵となっている事は不十分な此文によっても幾分か想察された事と信ずる。（了）

秋田県で載った新聞紹介

畠山義郎氏が「村の綴り方　木村文助の生涯」を出版し関連して各氏から思いが寄せられた。

高田準平氏　「現代学校教育への警鐘、新世紀に蘇る木村文助小論」（一～五）

菊地久文氏　「村の綴り方―木村文助の生涯―が示唆するもの」。山の家（金沢みつ）が引用されている。

小番績氏　「木村文助の仕事と生涯―畠山義郎、村の綴り方を読む」

畠山氏は元旦号に「綴り方教育の先駆　木村文助から学ぶ」を載せている。妹のねごと（松田あさ）が引用されている。

京都仏教大岡屋昭雄教授の論文

「木村文助研究　赤い鳥から生活綴り方へ」から

木村文助の生活綴り方実践を大野の資料、赤井千代の証言、高田うめ、金川つわの綴り方を元にまとめている。

鹿児島大教授狩野浩二教授の論文

「児童文体の成立　木村文助と赤い鳥」から

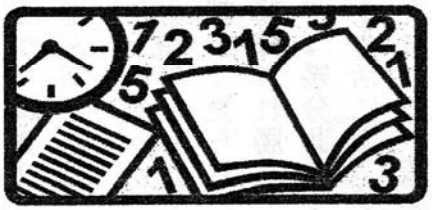
「村の綴り方」や「赤い鳥」に載った文章表現の研究で多くの綴り方が引用されている。

資料閲覧（赤い鳥・木村文助コーナー）

「大野町郷土資料室」

〇四一―一二〇一
北海道亀田郡大野町本町二〇〇
TEL（〇一三八）七七・六六八一

・開館；九・〇〇～一二・〇〇
　一三・〇〇～一六・〇〇
・休館；毎月第一月曜、臨時、年末年始
・国道二二七号から町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側です



発行　〇四一―一二〇一
北海道亀田郡大野町本町六八
木下　寿実夫
（〇一三八）七七・八五三五
町文化財保護研究会（ぶんぽけん）会員

歴史―どーなん人物散歩

戦前のつづり方教育の指導者

木村　文助

大野小の名を全国に

「つづり方教育」の指導者としては、「山びこ学校」で知られる教育家・無着成恭（むちゃく・せいきょう）が著名だが、戦前、無着に勝るとも劣らない活動を続ける教師が大野町にいた。木村文助である。

函館師範学校事務長から大野尋常高等小学校訓導兼校長に赴任したのは、大正六年（一九一七年）。数え三十六歳の時であった。

文助のつづり方教育は、従来の「修身」を重視する勧善懲悪主義に基づく温厚従順な生徒の育成を排し、青年時代から傾倒していた自然主義に基づき、ありのままを素直に表現する心身の成長を目標としたものであった。

文助は、標準語を主とする都市型ではなく方言を生かした農漁村型のつづり方を直接指導することで、この考えを実践した。生徒たちは、楽しみながら積極的に参加したのであった。

成果は、意外に早く表れた。折から鈴木三重吉主宰の児童雑誌「赤い鳥」は全国からつづり方を募集していた。大正七年八月号は応募作品二千編、その中から大野小学校一年の新栄とよの「橇（そり）」が見事第一席に入選した。

文助の喜びは大きかった。自己の教育方法の正しさが証明され自信を得た。このことは同校はもちろん、地方農漁村の生徒、父母、教師の刺激剤となった。

その後、同校生徒のつづり方は「赤い鳥」誌上をにぎわし、「赤い鳥学校」とまで称され、辺ぴな小学校が全国注視の的となったのである。

大正十三年、これまでの入選作品や校内作品を集大成した「綴（つづり）方生活、村の子供」を出版した。後に改訂版も出た。

文助は「つづり方教育」のみならず、農漁村の産業振興を組み入れた教育にも心掛けた郷土愛の教育者でもあった。

地方の児童文化運動を「つづり方」を通して推進、その運動指針を示し、全国的規模に引き上げた先駆者である。昭和十五年（一九四〇年）、「綴方教育連盟」が弾圧された。軍国主義の黒い影がひたひた迫り、ついに太平洋戦争が勃発（ぼっぱつ）、暗い谷間の時代に突入した。

文助は昭和十六年、札幌に赴任したが、翌年、森町に移り隠せい生活に入った。

＝敬称略＝

（北海道史研究協議会会員　近江　幸雄）

標準語に迎合せず、地域の方言を尊重した文助（大野町教委所蔵）

大野町郷土資料室にある「赤い鳥」195冊（復刻版）。文助関連資料は大野町文化財保護研究会が研究を続けている

きむら・ぶんすけ
（1882―1993年）

秋田県生まれ。秋田師範学校を卒業後、県内で教員生活を送る。1917年、同郷だった函館師範学校校長に招かれ来道。翌年大野尋常高等小学校訓導兼校長に就任。その後、砂原小学校を経て戸井日新小学校に転任。一貫して「つづり方」教育を展開して全国に名をはせた。37年、長男で作家の木二男と共著で「母の綴方」を出版、その他「村落児童文選」「悩みの修身」などの著書がある。